a missing person's press

血に飢えたブロンド／ディキンス・ハー

訳＝高階政重

ampp-034

＊

「なあ、――おまえだけだよ」――男は暗がりに入るや否や、女の唇を奪った。スーツに包まれた腕が緊張と、それにつづく力みで醜くゆがむ。女は小さな拳で、男の胸を叩くが、男は動じない。それどころか、もっと迫って来る。やがて押し倒した躰を眺め、ゆっくりとズボンを下ろした。苦痛と苦悶のなか、あらゆる罪を背負わされたように女は犯された。そして情事の終わり、男は暗闇のなかで札びらを投げて寄越した。

「それがおまえの値段だ」

ドアがひらき、また閉じる。網膜を突き破るような失意が女の顔にあった。夜の車道を突っ走る車の光りが一瞬、かの女を捕らえた。ブロンドの髪、白いジャケット。女はしばらく呆然としていたものの、すぐに救急車を共用部にそなえつけの電話で呼んだ。じぶんがいまいるところさえわからないのにだ。戸口に立った。番地を確かめる。カースン通りの２８５７番地、ノース・スター・モーテルの一室。幹線道路沿いの小さなモーテル。暗い室で立っていると、襲って来た男がノースビュー高校の用務員、ジム・パトラーであるのを懐いだした。パトラーは黒人で、女は白人の生徒だ。きのうまで愉しかった高校時代がなによりも切なかった。やがて到着した救急車に事情を話したとき、だれかが笑ったような、そんな錯覚がした。とめどない恥辱と怒りのなか、呼吸を乱し、かの女はついに気を失った。

病院でひと晩過ごして、女はパトラーを警察に突きだすべきかで迷ってしまった。犯されたのは事実だ、しかしそれ以上に「犯された女」がまわりからどう見られてしまうのかが怖かった。それでも朝になって警察と学校に電話して、ことのあらましを語った。ひとびとの声はみなやさしかった。それでも汚いものを拭うような息づかいがだれにもあった。かの女は

実家でも、警察署でも、なんの濁りなく出来事を話した。

「ええ、そうなんです。授業が終わったあと、パトラーと出会しました。いつもなら、そのまま通り過ぎるんですが、そのときはあの男から話しかけられて、つい車に乗ってしまったんです。それから酒を呑まされて……」

やけに明るい警察署内だった。数多の個室が並んだ廊下の終わりで保安官助手が話を聴いている。隣から女の話声がする。そして話題がモーテルのなかに及んだところで、あきらかにかれの目つきがかわったのをかの女は見逃さなかった。蔑みの色を持った緑色の眼が、かの女を捉えて放さない。声がつまる。

「エル・トンプソンさん、もういちど伺います。モーテルの室に入れられて、どうしたんです？」

かれの制帽が鐘のようにゆれる。大きな声が鳴り響くなか、脅えた眼でかの女は保安官助手を見つめた。

「キスされて、押し倒されたんです……」

制帽は問いかける。テープレコーダーが音を発てて反応する。

「どうして逃げなかったんですか？」

保安官助手が云った。かれのうしろで母が夕餉の皿を並べている。そのとき、エルはなぜ遠くに行きたいとおもった。ニューヨークでブロードウェイに立ちたいとおもった。生まれてこの方芝居になんて興味も持ったことがないのに。聴取は手短に終わって、車で家に帰された。同級生のモーリン・ジャクソンが家のまえで、なにやらぐずぐずしている。かの女はモーリンがきらいだった。エルは顔を見たくなかった。エルが帰ると台所から母の声がした。玄関の鏡に映る母はなぜか黙ってこちらを責めるように見つめている。廊下をまっすぐ歩き、警察署の右をゆくと、馴染み深い母の食卓にたどり着く。母はため息を吐きながら云った。

「あなた、どうして車になんか乗ったの？」

手許の新聞には住宅事情についての記事があった。窓の多い家の写真が写っていた。反射的に窓の数を算えてしまう。それを見ないようにしてエルは答えた。――乗ったのよ、わたしは。でも、あんなことになるなんておもってもないじゃないと。母は豆料理を皿によそった。2階へ通じる階段から、父が現れる。もう長いこと失業中だ。かれの姿にまるで平手で打たれたようにエルは顔を蹙めた。父もため息を吐いた。その一瞬に蔑みを感じて、エルは身じろいだ。

「たいへんな眼に遭ったね、エル」

ありきたりの会話だった。まるでへたな芝居みたいに、ありきたりだ。

「そうね、お父さん。わたし、なんだか変わってしまったような気分よ」

「そんなことないさ。おまえはおまえのままだよ」

父がかの女の肩に触れようとした一瞬、かの女は小さく悲鳴した。父はかの女の顔を覗き込み、そして小さく云った、――あの黒んぼうめが。――学校に抗議してやる！――父が息巻く。

「やめてよ！」

エルが云った。エル自身も信じられないくらいの大きな声だった。脅えたようにかの女は躰を縮めた。じぶんをじぶんで抱きしめ、ゆっくりとコップに手を伸ばした。コップのなかは空だった。点けっぱなしのラジオが不穏な音楽とともに侵入する。午後のニュースは住宅差別の問題を報じていた。もちろん、白人の視点でだ。強姦された女としてエルは気が気ではかった。寄りによって黒人なんかに犯されて、エルはじぶんの価値がなくなったように感じた。またもモーリンはエルの見舞いに行った。リズやエリスを連れて。でも、エルはかの女たちのような、日陰者にまとわりつかれるのがいやだった。エルはかの女らのことがきらいだった。かの女たちが帰るまで窓のカーテンを閉じて、神に祈るように頭を垂れていた。そんなことも知らずにモーリンたちはドア・ベルを鳴らす。母がでて、追っ払う。学校での新しい生活がだんだんと無意味なも

のになってゆく。わるい噂が出回っているにちがいないとおもった。

化粧台をひさびさに開いた。じぶんは鏡のなかでは健康に見える、幸福に見える。でも、うちに隠されたことはわからない。階下のラジオの声がパトラーについて喋っている。母の沈黙に耳を塞ぎながら、エルは鏡を見た。もうだれにも自由にさせない、とおもった。登校を再開した。エルは18歳で公立校に通学していた。パトラーは懲役になっていた。7から30年の不定期刑である。かれは州刑務所へ送られた。けれども、エルにとってはそんなことはどうでもよかった。黒々としたものが心臓を流れる。ひやかしがしばらくつづいた。そのたびモーリンたちがかばった。よけいに惨めだった。

「ねえ、映画でも観ない？」

あるとき、優等生で名家の御曹司である、ウィリアム・グリーンが声をかけて来た。運動部のエースでもあった。かれはそれまでいちどもエルに話しかけたりもしなかったのに。事件のあと、きゅうに寄ってきた。はじめは軽口を叩くだけだったが、やがて真剣な顔で声をかけるようになった。エルは、じぶんと無関係な世界の人物だとおもった。

「なんで、あなたと行かなきゃならないの？」

エルは身構えた。

「きみのことが好きだからだよ。きみのことを知りたいんだ」

校庭を歩きながら、エルはおもった。こいつもみんなとおなじくからかっているんだわ。グリーンはなおも迫った。

「警戒しないでくれ、ほかのやつらみたいにきみのことをおもってなんかない」

しらじらしいやつだとエルはおもった。

「だったらあなたがおもうわたしってなに？」

グリーンは即答した。

「きみを守りたいっておもってるんだよ」
エルは、ハッとして息を呑んだ。
「わたしはだれにも守ってもらいたくない」
当惑するグリーンを無視してかの女は歩き去った。もうじき化学の授業だった。その授業も終わって、かの女はみんなと離れて下校した。グリーンがまたしても話しかけて来た。エルは早歩きで振り切ろうとする。しかし、グリーンも諦めない。感情的になったエルはふり返った。
「あなたにはふさわしい人間がいるはずよ」
グリーンが怒ったように問いかける。
「だれだよ、それって？」
エルは冷たい声で答える。
「穢れを知らないひとよね」
「きみはぼくを誤解してるよ、ぼくはそんな人間じゃない」
「けっきょくあなたも、ほかのひとたちと一緒よ。事件のあとにいきなりやって来て、ヌケヌケと」
エルはあたかも全世界が敵になったように云った。それでもグリーンはかの女を引き留めた。一瞬、店のショウ・ウインドウに黒人の姿が映った。なんでもない黒人の男が、そのときになってはじめて恐ろしいとおもった。グリーンは放心しているエルに云った。
「きみはまだ不安定なんだろう。帰り道は危険だ、うちの車に乗ればいい」
エルは急に押し黙ってグリーンと一緒に車を待った。エルのことはグリーンの両親も知っていた。バックミラーで、かれ

の母がエルをしばしば見つめた。このひともあのひともわたしを知っているとエルはおもった。高校を卒業したら、ミネアポリスで働くか、州立大に進みたい。早くこの町をでたいとおもった。家のまえで車を降りて、いったん立ち止まる。グリーンが声をかける。

「映画の話、考えて欲しい」

それだけ云ってかれは去っていった。こんな頭で映画なんか入ってこないのに。なにを考えているのかが、いまひとつわからない男だとおもった。そのときガレージから父がでて来た。怒りで固くなった眼差しでエルを見つめる。

「男には気をつけろと云ったはずだ、エル」

「かれは優等生よ」

「バスにちゃんと乗るんだ、拒否権はない！」

「妬いてるの？」

それきり父は黙ってしまった。真っ赤な顔でガレージへもどった。どうしたらいいのだろうとエルはおもった。母も情緒が乱れているようだし、わたしのことですっかり家族が壊れてしまったかのようだとも。以前は温かな家庭だったのに。いまではわたしがきゅうに外国人にでもなったかのような気分がする。週末のドライヴすらない。じぶんには罪も咎もないんだとエルはおもう。それでも、しきりにその考えを否定する欲求が立ち上がった。母の声がする。寝室で嘘び泣く母の声だった。

＊

バスの車窓からそとを眺めた。グリーンがわざわざ乗り込んで、エルに映画のチケットを渡した。ほかの生徒たちが見つめるなかでだった。グリーンはわるやつではないのかも知れないとエルはおもった。学校の人気者に云いよられるのもわるかないとおもった。まわりのことを忘れてふたりは談笑した。

「なんでえ、あんな淫売！」と笑う男たちの声もかまわずにふたりは話しつづけた。グリーンはエルの手をとった。放課後になると、グリーンの母の車で帰ることも多くなった。グリーンは免許を取ったと云い、エルにドライヴを約束した。父にはぜんぶ内緒のことだった。ただ事件を知っているグリーンの家族はエルを見るたびに顔を背け、まともに見ようとしなかった。いつもいつもふたりのことに聞き耳を立てているようだった。グリーンの親はたびたび息子のまえでかの女について辛辣さを隠さなかった。一切挨拶もせず、バックミラーから軽蔑の眼差しをエルに送った。エルとグリーンはふたりの仲に邪魔が入らないように過ごした。

そして映画の夜。ふたりは口づけをした。映画は『無分別』という作品だった。

「きみのことが好きだよ、ただ――」

「ただ？」

エルは首をかしげた。

「ぼくの親がつきあってるのが好かないんだ」

グリーンは口をゆがめて苦笑いした。

「そんなこと、ちっともかまわないわよ」

一瞬グリーンのことがわからなくなった。親のことぐらいでどうこう云うような男だとはおもっていなかったからだ。

「でも、ぼくはぼくの進路が心配なんだ」

「なによ、それ？」

いきなり、エルのなかで失望が湧いた。ふたりは手を握り合ったまま最後まで観た。そして帰りの車のなかではじめてエルは莨を吸い、酒を呑んだ。したたかに酔ったエルには帰る場所がない。けっきょくはグリーンの家のガレージでひと晩を過ごした。もちろん、朝帰りのひとり娘の素行に両親は怒った。外出禁止を云い渡された。学校以外、どこにも行けない。

グリーンからなんどか電話があったものの、父に切られてしまった。母は母で、娘を不良だと罵ってふたたび泣いた。それでもグリーンはモーリンたちに手紙を預け、エルに渡した。どうにかエルが家出してくれるように懇願した。学校内ではまたしてもエルのことが話題になった。グリーンが熱心に誘うさまにみんなが嬌声をあげた。

「グリーン、おまえいつまでエルに気を回してるんだ？」

「気にするな。――おれの女だ、おれの好きにしてやる」

グリーンは同級生のなかでも、特別親密な生徒には本音を洩らしていた。やがて卒業の季節になった。エルとグリーン、そしてグリーンの取り巻きたちの7人集まってパーティーをやることになった。エルがグリーンの車を待っている頃だった。モーリンから電話があった。――グリーンのやつ、あなたのことを仲間内で暴行するつもりよ、――かれの話を聞いたの。――みんなで集まって、あなたを好きにするって！

エルにはわからなかった。なぜモーリンがかれについて告げ口をするのか、エルにはわからなかった。エルは怒って電話を切った。かわいそうなモーリン、日陰者でだれの友人にもなれないモーリン。そんな告げ口をするために電話をかけるなんてよほどわたしが妬ましいのだろうとおもった。それでも時間とともにグリーンを疑ってしまうじぶんもいる。どっちがほんとうのじぶんなのかもわからない。なんとなく鏡を見る。パトラーがうしろから迫ってきた。そしてそのままわたしの首に喰らいつく。怖くなって台所へ行くと、窓のむこうで尋問室が夢幻のようにつづいていた。グリーンは本気でわたしを

輪姦するつもりだろうか。窓のむこうに向かって叫び、保安官を呼ぼうとしたが声がでない。その一瞬、ドアベルが鳴った。それはまちがいなく、グリーンであり、同時にパトラーでもある。

「こんばんは、お嬢さん」

まちがいなく、グリーンの声だ。

エルは安心してかれの腕をとった。そしておもてのフォードに乗り込んだ。

「どんな場所へ誘ってくれるの？」

不安を打ち消しながらエルは訊いた。

「貸別荘だよ、もうみんな集まってる」

「みんなってだれ？」

「ビグズリー、ガーランド、ブッカー、バーンズ、あとはマイヤー」

ぜんぶ知らない生徒たちだ。もしかしたら女はわたしだけかも知れないとエルはおもった。モーリンの電話が懐いだされる。行き先のわからない車にこのまま乗っているのは気分がわるい。エルの躰が硬直する。動けない。ウィスキーが欲しい。

――やっと絞りだした辞がそれだった。どうにか緊張から抜けたいとエルはおもった。

「バックシートにオールド・クロウがあるよ」

酒があるとわかってはじめて緊張がとれた。

「優等生とはおもえないわね」

「そりゃ学校での話さ」

家々の燈が通り過ぎてゆく。ミネトンカ湖まであと2マイルを切った。別荘地はもうじきだった。時間とともに失望感が

増してゆく。じぶんへと迫る不運や危険と戦う気力もだんだんと失われてゆく。エルは窓をあけた。バーボンで熱くなった躰も夜風に冷えてしまった。吐息を嘔きながらグリーンにすべて任せた。もう逃げられない。

＊

湖畔の別荘地は裏寂しいところだった。車を降りたエルの腕を、おなじく降りてきたグリーンがつよく掴む。——痛いとエルはおもった。ベルを鳴らすと、酔った男たちが迎える。やはり女はエルだけだ。男たちが自己紹介する。そんなことは聞きたくないとエルはおもった。恐怖心が迫りあがって来る。

「パトラーがしたようにしたいの？」

好色そうな男たちの顔、グリーンのうそごと、もうなにも信じられない。グリーンは初めからそのつもりだったのだろうか。ではなぜさっさと決着をつけなかったのか。わたしをここまで連れてきて辱めるなんて。レコードの音がうるさくて、ありえないほど腹が立った。Link Wray & His Ray Menの"Rumble"だった。

「察しがいいな、エル。流石だよ」

グリーンには罪悪感というものがない。なにも恐れはしないといった態度だ。エルは静かに返した。

「わたしのなにがわるいの？ それともわたしがなにかしたとでも云うの？」

「おれは験してみたかったんだ。生徒会長のおれがどこまで女をコマせるかってね。危険はわかっていたさ。進学も将来もなくしたくない。でもね、おれはおまえの事件を知ったとき、やってみなければとおもったんだ」

エルは長らく黙っていた。ずっとかれを見つめていた。ふたりして将来を約束したことなど決してなかったが、グリーン

がじぶんから遠ざかるのが見えるくらいだった。エルはやがて笑い声をあげた。壁際のステレオセットからレコードを取り上げた。それを天井へ投げた。グリーンはその頬を打ち据えた。壁にぶつかって床に倒れるエルを見た。それから手荒にかの女を縛り上げて仲間たちに合図した。

「みんな、好きにやれよ！」

ひとりひとりがエルを嬲った。男たちが責め立てる。役目の終わった男がレコードをかける。またもエレキのインスト曲だった。そのとき、はじめてエルはグリーンを殺したいとおもった。最大限の苦痛とともに葬りたいと願った。

＊

エルが家に帰されたとき、もう夜は明けていた。性器がとても痛い。グリーンは帰りの車のなか、とても機嫌そうだった。じぶんの欲望が達成されたからか、それともエルに告発の意思がないのを読み取ったからか。グリーンの一家は名家だった。開拓時代からつづく家系だった。かれの財力があれば輪姦くらい、揉み消すこともできるだろう。しかしグリーンには死んで貰うしかないとエルは誓った。

「エル、きみは男に忠実な女になれるよ」

去り際にグリーンは云った。

「きみとおれとどっちが信用に値するかを考えろ」

それきりだった。卒業までエルとグリーンは互いに知らない関係のように過ごした。まわりのだれかが囃し立てたとしても。エルはミネソタ大学に進学した。それでも殺意はそのままだ。あるとき、電話があった。モーリンからだった。いまは

街のレコード店で働いているという。エルはモーリンに申しわけない気分だった。もしも、あの夜にかの女を信じていたらとおもうと胸が痛かった。グリーンを信じたじぶんの愚かさで嘔きそうだった。

「あなたには申し訳なかったとおもう。ずっとじぶんのことしか頭になくて、驕っていたっていまはおもう」

「エル、詫びることはないのよ。ただ無事でよかった」

「ありがとう、モーリン」

いずれ会う約束をしてふたりは電話を切った。そしてレコード店のちかくの喫茶店で会った。エルは高校時代のことを話した。ずっとモーリンを遠ざけていたことも。そしてモーリンもエルに惹かれながら距離があって口惜しかったと云った。

「グリーンのことはどうなったの？」

「――逃げてきたわ」

わかり合えそうになりながら、それでもエルはうそを吐いた。そのうそが重すぎて、かの女が帰ったあとにバーへ行ってビールを1杯だけ呑んだ。それでも夜になれば悪夢のなかにいた。パトラーやグリーンやパーティーの男たちの幻に魘された。そのたびにフルボトルのバーボンを少しずつ呑み、やがて成績が落ちた。とうとう英文学の単位を落とした。男たちの幻影、そのなかにあって、もはやまともな学生生活はないとエルはおもった。カウンセリングを受け、やり治そうと決めた。わずか1年生で休学を撰んだ。なによりもグリーンを殺すために。エルは卒業名簿からグリーンがノースウェスタン大学に進学したことを知った。――「のんきな獲物」とエルはかれに名づけた。

＊

エルは手帖に計画をしたためた。その計画は移動を含めてエルには大がかりだった。もしもかれがイェール大や、イギリスにでも留学に行ってしまえばエルの予算では破綻しかねない。まずはミネアポリスからウィスコンシン州へ入り、オークレア、マディソンを経てシカゴ北郊へ向かう、長い陸路を進むことになる。順路は見つかったものの、まだ頼りない。グリーンの下宿先はかれの実家に偽名で問い合わせが済んでいて、兇器のナイフも準備したものの、殺害のタイミングがまだだった。いきなり下宿に押しかけてそのまま刺し殺してしまうか。いいや、それでは騒がれるだけだ。深夜にドライヴでも誘って、人気のないところで殺したい。

もしも、かれがわたしの誘いに乗らなかったらどうなるだろう?——でも、かれはまるでわたしを疑ってなどいないだろう。きゅうに現れたわたしを見て、かれが云い終わるまえにその命を奪いたい。やがてエヴァンストン市内のバス停に到着にたどり着く。長距離バスの発着場でエルは降り立った。真昼の温いかぜの通る道を最小限の荷物で歩く。中身は、替えの下着と手帖と地図とナイフだ。すぐに宿を探した。それもグリーンの下宿のちかい場所だ。

エルは1週間ぶんの前払いをしてグリーンの見張りをした。グリーンは決まっておなじ食堂で昼食を済ますということがわかった。そしてかれの下宿には駐車場もあって、光沢のあるメルセデスが駐められていた。そして毎晩ちがう女を連れて、ドライヴにでかけている。あるとき、グリーンとすれちがった。エルはこのときのグリーンを回想した。かれはなにも気づかないで去って行った。顔を見られるのはまずいとおもった。エルは黒いマスクとスパナを買った。

やがて予算も尽きて、その日が旅の最終予定日だった。もし金がなくなれば躰を売るつもりでいた。女を乗せたグリーンの車が駐車場に入る。マスクをしたエルはメルセデスに近寄った。降りてくるグリーンの頭をいきなりスパナで叩きわった。血飛沫が車体に降りかかり、グリーンの悲鳴が通りに響く。エルはグリーンのメルセデスに乗り込んで、そのまま急発進で走り去った。シカゴ北郊で車を乗り捨てたエルは証拠になりそうなものをぜんぶ棄てた。スパナもマスクも、使わなかった

ナイフも。

新聞を読んだときには、もう車は発見されて、車内からブロンドの毛髪が発見されたとあった。エルは慌ててミネソタにもどった。こんなときのためにモーリンにアリバイの証人を頼めばよかったと唇を噛んだ。そして同時に友情をエサにするような、浅ましい女だとじぶんを責めた。雑誌のまとめ記事によると、グリーンには複数の交際相手がいて、そのなかにブロンドの女がいるということだった。じぶんは無実になれるかも知れない。エルは希望を持つことにした。

下宿に帰ると、モーリンから電話があった。グリーンのことを話していた。かれは重傷だが生きていると云われ、ひどく動揺した。やつは生きている、ぜったいに殺さねば。――わたしはなにも知らない、怪我の男のことなんか、エルはまた唇を噛んだ。警察は怨恨の線で捜査している。しかし、ことが露見すればグリーンも男たちも無傷では済まない。わたしの正体なんか知らないほうがグリーン一家も平和でいられるはず――エルは悩みのなかで算段を決めた。事件について知らないで通すことにした。そしてエルは自身の体面のためだけに復学した。両親は喜んだものの、高校の同級生のなかでは、いまだにパトラー事件が語られていた。

「グリーンはまちがっていた。そしてあなたもよ、エル」

「なんのことなの？」

「あなたがグリーンを襲ったのよ。襲われた仕返しに」

モーリンは眼を輝かせた。

「わたしたち、もっと親しくなれるわよ」

エルは戸惑った。エルにとって秘密をたやすく暴いてしまったからだ。それでもエルは抵抗を試みた。

「いまだって、親しいじゃないの？」

「いいえ、不完全よ、わたしたち」

不思議な気分だった。そんなことを云われるなんて。エルはモーリンにすべてを告白した。

「あんな男たちは死ねばいいのよ。わたしたちがひとりひとり地獄に送ってやるのよ」

エルは焦った。そしてモーリンの辞を遮った。

「ちょっと待ってよ。べつにわたしは殺したいわけじゃない」

かの女はまたうそを吐いた、唇を少し噛んだ。

「でも、殺そうとしたものは事実よね？」

エルは頷いた。

「これで話は決まったわ。盛り場でひと狩りをするのよ。まずは映画館ね」

エルは黙った。このままでは話が決まってしまうというのに。両親だけには事実を知られたくはない。

「なにもほんとうに殺す必要はないのよ、ただわるいやつらを引き寄せて奪うのよ」

「そうね、それなら大してわるくもない気がするわ」

ふたりは夜を待って時間を潰した。エルにとって道徳や倫理はあやふやだった。だから社会規範というものを所詮互いの偏見を擦りあう場所でしかないと考えていた。しかし実際のエルは、社会的な体面には敏感だが、他者への倫理的責任には鈍感なだけの女だった。

＊

最初の獲物になったのはスーパーのソーセージ、香水の一壜、両切莨の2カートン、贈答用の食器セットでしかない。つまりは子供の遊びのようなものだった。次がカール・パーカーという眼鏡の大学生で、エルの先輩だった。かれから地元までの切符を瞞し取って売却した。さらにつぎが事件屋のコール・ジョンソンで、かれには乱交現場の手入れがあると、うそのネタで恥を掻かせた。ネタはモーリンが書いた。エルの発案は最初の万引きとパーカーの件についてだった。それでも犯罪を重ねるうちにエルもじぶんの発想をネタにするようになっていく。

エルの最初の共同戦線は、深夜のダイナーだった。金のありそうな客を狙って痴漢だと騒いだ。モーリンが証言する。しかし黒人のモーリンを信じるのは希でエルと役割を交代することも多かった。いくつかの示談金が入る。喜びのなかで輝く夏の陽光——その金で1ヶ月も遊んで暮らした。好い服を着て、好いヒールを履いて、好い男たちと遊んだ。すべてが気まぐれの芝居みたいに過ぎてゆく。夏が終わった。街のなかでは恐喝屋のヒースという男がふたりのことを探っていた。勝手に所場を荒らした咎でだ。まずはモーリンが餌食になった。黒人の遊び人はどれも札付きだった。かの女もじぶんの社会での地位に悩む小娘のひとりに過ぎなかった。

「ランディ・ジョンソンの恋人になればいいのに」とエルは云った。ランディは白人の男だ。

モーリンは首をふった。

「だめよ、遊ばれて終わるのがわたしの人種なのよ」

その日、モーリンが街から消えた。レコード屋の店主は仕事を逃げたと愚痴を云った。でも、エルにはわかっていた。かの女が掴まったと。最近うろついていた地廻りの白人たちのことにも気づいていた。しかし、それでもエルはかの女に警告する時間を失っていた。もどって来たときのモーリンが青痣を顔中につくっていた。エルは、ニコレット街区を抜けて、ゲートウェイ地区の酒場や映画館のまえを歩いた。どこかにヒースがいるかも知れない。そうおもって秋風のなかを歩く。吐

瀉物の臭い、賭博場の燈、女衒たちの挑戦的な眼つきが心に痛い。そこらを歩いていると男が寄ってきた。

「あんた、モーリンっていう黒ン坊の仲間だろ？」

「詳しいのね？」

「上品ぶるな、アマ公。ミスタ・ヒースに挨拶が必要だ」

「そうらしいわね。――決着をつけに来たわ」

男はせせら笑った。売人なのか、妙な臭いがしている。

「こっちへ来いよ、ミスタ・ヒースがお待ちだ」

駐車場へとむかった。リンカーン・コンチネンタルが待機していた。身じろぎもせずにエルはフロントグラスに延びるじぶんのかげを不思議そうに見つめた。案内の男が恭しくドアをあけて、なかへ招いた。運転手、案内人、そしてエルが乗って走りだす。案内人はしきりに莨を薦めた。どうやら麻薬莨のようだった。エルは断ってまえを見た。街の燈がむなしかった。いまごろ、モーリンはどうしているだろう。職場にはもどれただろうかと考える。

やがて車がモーテルに着いた。おもてのポーチには男がひとり立っている。太っても痩せてもいない男、なんらおもしろいところがない、そんな男だった。かれは車に手をふると、ブリーフケースから書類をだした。エルと案内人は降りて、その書類を見せられた。血まみれになったモーリンの写った拡大写真である。プロフィールも載せてある。エルはカッとして男に掴みかかった。案内人がその肩をブラックジャックで撲りつけ、エルは重力を失った。

＊

エルの躰の上でなにかが動いている。男の躰だった。エルは犯されながら、酩酊感にも気づいた。注射を打たれたにちがいないとおもった。躰の自由が効かない。男にはなんのためらいもなく、かの女のなかを揺らした。音楽なんかなかった。時計の針だけがかの女のなかで音を発てる。やっとのおもいで声がだせた。力いっぱいに叫ぶ。ヒースがエルの頬を平手で撲った。パトラーのときも、グリーンのときも、わたしは男に支配されてきた。なぜ、その支配から自由になれないのだろうとおもった。車道をゆく車のライト群、点滅するネオンの看板、油の切れたエレヴェータの駆動音を聞きながら、かの女はまたも犯されていた。

ことが終わる頃には薬効も終わりだった。ゆっくりと上半身を起こして、エルはじぶんから男に口淫をした。やがて男の力が尽きて弱くなる。エルはスパナでヒースを撲ってから、時間と体力をかけて絞殺した。あとに残された夜をわたしは自由に歩きたい。エルはそうおもった。ヒッチハイクで下宿まで帰った。車のなかでは若い音楽家が、だれそれの演奏を褒めていた。なぜか、そのときほど人間らしくじぶんを感じたことはなかった。帰ってモーリンへ電話した。

「ヒースを殺した。あした、いつもの店で会いたい」

モーリンには信じられなかった。若い女が暗黒街の大物を殺すなんて。「とてもじゃないけど、すぐには会えない」と云った。エルはモーリンでさえ、わたしを一個人として扱ってくれないとおもった。深夜の路上で、またあの音楽家に会いたいとおもった。人間らしさとはいったい、なにをして云うのだろう。それが殺人ではないのがわかっていた。エルは少し泣いから、エルに手紙を書いた。かの女と離れるために。

＊

エルがモーリンと会ったのは10月の半ばだった。モーリンははっきりと自首を勧めた。それでもエルはじぶんを通した。そろそろ、この土地から離れる必要がある。大学はもういい。わたしがいるべき場所じゃない。モーリンとのつき合いもやめる。それからしばらくしてエルは贋の身分証をあつらえた。ヘレン・プライスというのが、かの女のあたらしいなまえだ。またも長距離バスに乗って街のおもいでを回想した。そして手帖にモーリンへ捧ぐ詩を書き留めた。

わたしはあなたを求めていた
あなたもわたしを求めていた
十月の並木を流れる車すら
わたしたちを祝福していた
それでもわたしたちはよそものだった
それでもわたしたちはよく話したものだった
都市計画によって伐られる、その木の枝を見ておいて
そして永遠に失われたものを忘れないでいて

＊

オハイオ州トレドで、さっそくかの女は男を殺した。。酒場でしつこい男だった。それでも金払いはよかったはずだ。もう男はこの世にいない。窓のむこうは朝だった。エルはまだ温もりの残るベッドをあとにした。始末した男はこれで2人めだ。もうなにを躊躇うこともない。踵を鳴らしてヒールを履き、表通りのカフェまで迷いなく進む。いちばんお気に入りのスカートを穿いて腰を振った。窓際の席でいちゃつく男女がかの女を見あげる。男はもうエルに夢中だ。だって、かの女がいちばんだからだ。白いジャケットを着て歩くかの女がなによりも美しかったからだ。だれにも知られないようにかの女を閉じ込めたくなる。所有したくなる。そんな歪な欲望さえも、ささやかなものに見えてしまうくらいにかの女のブロンドは好戦的な輝きを持っていた。ジェイクとマーシーはカウンターから身を乗りだしている。かれらはつまらない常連の一部だ。店内に入って来たかの女を迎えるのはオーナーのクエンティーン。かの女はゆっくりと席を撰び、そして坐った。静まりかえった店にラジオの音声だけがむなしく流れている。ウェイトレスがやって来る。

「ご注文は？」

「コーヒーとマフィンをお願い」

エルは店の男を見渡した。車を持っている男、金のある男を捜した。

「この席、空いてる？」

見あげると男がいた。わるくない男。わたしにお金をくれて、死体になってくれる男。エルは頬笑んだ。男も表情を崩した。やつもウェイトレスを呼び、ソーダファウンテンを注文した。ああ、なんて倖せなんだろう。もう男たちに瞞されることはないのだ。所有されることもないのだとエルはおもった。もはや、じぶんが自由で、そして穢されることのない象徴のようだとおもった。次はこの男から航空券を引きだそう、そうおもってエルはハンドバッグのなかから鏡を取りだした。

「どっから来たの？」

「ツインシティーズよ」
「学生？」
「そうでもないの。――いま休学中でね。資格を取ろうとおもってるの」
「へえ、偉いね」
「だれか、ニューヨークに伝のあるひとがいたらいいんだけど」
「おれ、あるよ」
男の顔がパッと明るくなった。この瞬間が快感だった。女を利用しようと企む男をいまエルは捕らえたのだ。蟻地獄のように静かな罠がかの女の心のなかで疼く。もはや逃げ道はない。ふたりは食事を終えると、すぐに店をでた。そして男の車で、かれの家にいった。ニューヨークにいったら、どんな人生が待っているだろう。エルは胸を高鳴らせていた。そして今回の獲物からはどれほどの収穫があるのかを、男の仕草や、服の質から読み取ろうとしていた。この男もたやすく死体になってくれた。そしてニューヨークへむかうためにトレド・エクスプレス空港に立った。係員が出発予定時刻の少なくとも20分まえに航空券確認地点へ来るよう案内していた。無事にニューヨークに来たかの女は安住の場所を求めて彷徨った。しかし、かの女はヘレン・プライスとして掴まった。ニューヨークの路地裏で、ひとりのひもじい娼婦としての摘発だった。しかし、かの女の犯罪は確認できなかった。偽名がバレたあとも、逮捕はされず、過去の殺人傷害との関係は不明だった。エルは性病を患っていた。医者にかかる金もなく、ヘロインを常用していた。やがて救護院へと送られ、両親とも再会した。

＊

エルのことをかの女の両親から伝えられたモーリンはすぐに見舞いに行った。しかし、ふたりはすでに他人同士だった。青春の日々を悲しく浪費したもの同士ではあるが、齟齬があまりにもありすぎた。街のモーテルでエルは隠遁生活をしていた。性病は癒えても薬物依存と、両親のメンツを守るために父に連れて来られたのだ。

「もうだれにも近づいたりしない、承認を求めるのは疲れたから」

エルはベッドで酒を呑んでいた。

「ほんとうに3人も殺したの？」

「いいえ、5人よ。あとふたりニグロの死体がある」

そう呟いてエルは笑った。ガラスの擦れ合うような声だった。モーリンの証言によって、連続殺人が明るみになり、エルが逮捕されたのは日曜日の朝だった。よく晴れたそらを夏鳥が騒ぐなか、モーテルのドアを警官が訪れた。エルが復学してから1年が経っていた。エルは抵抗しなかった。すべてが運命であるかのようにふるまい、そして静かに頬笑んだ。かの女の写真が公開されると、男たちは口笛を鳴らしたものだ。あれほどすばらしい女が、黒人殺しの犯人だとは！白人の男にとっては格好の話題だった。「ブロンドの悪魔」はその日のうちに映画界にも飛び火した。かの女をモデルに映画をつくろうという卑しい野心家たちで、ハリウッドはいっぱいだったからである。

「わたしはわたしの所業に悔いはないわ」

エルはそういって宣誓書にサインした。ミネソタの両親はじぶんの娘が悪魔に取り憑かれていたと新聞記者に語った。かの女を知っているもの、全員がかの女が別人に変わったと云った。もちろん死者以外はそれを信じた。エルを表紙に売り上げをあげる雑誌や、ポスターが流行った。かの女は消費物として時代を飾ることになった。エルが拘置所へ移され、一般の面会も赦されると、マスメディアが押し寄せた。かの女は丁寧に対応した。そして故郷の両親にむかって、じぶんはじぶん

であり、悪魔憑きではないと答えた。そんななか、黒人活動家は「かの女を死刑するべきだ」と訴えたが、相手にされなかった。世間はかれらに冷ややかだった。公民権運動を疎ましくおもう輩の一部は活動家たちを攻撃したりもした。けっきょく映画制作も押し切られ、おぞましい題名のもとに多数が公開された。そのなかでも異色だったのはモーリンの視点で描かれた、『悪の瞳』だ。映画の冒頭とラストにモーリン・ジャクソン本人が登場する、セミ・ドキュメンタリー映画なのである。モーリンはエルとの最後の会話について話している。「わたしたち、友だちよね?」と云ったエルに対して、モーリンは「ちがう。もともとが他人よ」と突き返したと語った。しかし、殺人さえしなければどれだけひとを瞞しても気にかけないエルこそが願望そのものだった。

「わたしってもうお終いね」

「終わってなんかいないのよ、なにもかもね」

エルは黙った。

「ニグロってもう一回云ってみなよ。だれを殺したの?」

エルはなにもなかったかのように頬笑んだ。それ以来モーリンは裁判にも来なかった。エルは第二級殺人で起訴され、傷害罪でも追起訴された。しかし若い年齢、女性であること、相手が風体のわるい男たちであったこと、膨大な嘆願書が提出されたことで、エルは減刑され、15年以上、40年以下の実刑となった。白人の一部は安堵され、黒人の一部では逆鱗に触れた。エルは刑務所でも目立った。ほかの女囚たちから眼をつけられるのはあたりまえだった。黒人受刑者と隔離されていたのは幸いだった。だが刑務官たちによってエルは強姦された。そして妊娠した。恩赦を期待するのはむつかしい。エルを一個人として扱わなかった社会は、殺されたひとびともまた一個人として扱わなかった。われわれはひとりの人間に対してですら、これほどまでに取り零してしまう。かの女の犯罪がどうして起こったか、どう裁かれるべきだったか、社会がどう動

くべきだったのかもわからないままにかの女を消費物として利用し尽くした。エルはもはや一個人ではない。なにかの表徴のようなものだ。神話化されたブロンドの象徴に靡く、数え切れない欲望もろとも、われわれもまた地獄へ落ちるべきのだ。さようなら、エル・トンプソン。モーリンはいまも塀の外で黒人犠牲者たちを弔っている。かれらの無念に問いかける。それがいつ、贖われるのかはいまだわかっていない。

＊

訳者あとがき

高校時代に黒人男性から暴行を受け、周囲からも疎外されたエル・トンプソンが、やがて男性社会と自分を取り巻く共同体に牙を剝く。この物語が半世紀以上の歳月を経てふたたび脚光を浴びたのは、二〇二四年に映画『そのブロンドは赦さない』として、新たに世に送り出されたからである。映画化に際しては、原作に漂う黒人蔑視的な空気を取り除くべく、物語の徹底した改作が施された。舞台は現代に移され、エルは最初から白人コミュニティの内部で疎外されている人物として描かれる。男性社会や家父長主義的な価値観からの脱却が物語の中心となり、相手の男を必ずしも殺すわけではない、気まぐれで予測のつかない人物へと変更された。登場する黒人たちも、おしなべて理性的であり、ごく限られた場合を除いて、主人公に厳しい態度を取ることはない。そして映画のエルには、終身刑という結末が用意されている。

本書は、ディキンス・ハーの小説『血に飢えたブロンド』（原題 *A Bloodthirsty Blonde*, 1959）の全訳である。翻訳にあたっては、一九五九年にアメリカのHABERLINES社から刊行された初版本を底本とした。最新の映画と原作との隔たりを見ていると、それぞれの時代が望んだ幻想を、べつべつの人間が書き取ったもののようにおもわれる。どちらも優れた作品である。しかし、一点だけ、映画におけるモーリンの扱いには疑問が残った。

モーリンがエルに憧れながらも、殺人を肯定しないという態度は、けっしてまちがっていない。だが、かつてふたりがともに楽しんだ詐欺行為までも、公然と非難する人物に変更されたことには、どうしても違和感がつきまとった。原作のモーリンは、エルの友人であると同時に、犯罪の共犯者でもあった。だからこそ、ふたりの友情には、たんなる善悪の問題だけでは割り切れないものがあったのだとおもう。

一時の青春には、犯罪すらも美学のように映る瞬間があってもいいはずである。それは犯罪を正当化することではない。若さゆえの傲慢さや陶酔、そして取り返しのつかない過ちを、あらかじめ正しい言葉によって整理してしまわないということである。モーリンが最後にエルから離れてゆくことの悲しさも、かつてふたりが共犯者として生きていた時間があってこそ、いっそう深いものになる。原作のエルもモーリンも、けっして模範的な人物ではない。ふたりは互いを求めながら、最後まで互いを理解し尽くすことができなかった。そしてエルを取り巻く社会もまた、かの女を理解するかわりに、ひとつの象徴として消費していった。半世紀以上を経たいま、この小説を読み返す意味があるとすれば、そうした人間の矛盾や、時代の欲望を、安易に解決しないところにあるのかもしれない。今回の翻訳に係わってくださったすべての方々に、ただ感謝するばかりである。篤くお礼を申し上げます。

高階政重

著者来歴

ディキンス・ハー／１９２７年、ミネソタ出身、セントポール西部高等学校卒業。雑仕事を転々とする。皿洗いから食肉工場労働までこなす。文芸誌への投稿をきっかけに『日曜日の剃刀』でデビュー。１９７６年、『プラスチックのキリスト』が絶筆となり、同年に世を去る。近年になって再発見・再読され、有志によるアンソロジー『ディキンス・ハーかく語りき』が米国内で出版されている。

高階政重／１９８８年、広島市生まれ、法政大学除籍後に作家を目指すも挫折。映画批評をまとめてＺＩＮＥを出版。自称・窃視症の港湾労働者。小説家のディキンス・ハー、詩人のアラン・マッケルの翻訳を展開している。現在、求職中。

新刊情報

アンソロジー『ディキンス・ハーかく語りき』は、幻のパルプ作家、ディキンス・ハーの主要作品、そしてインタビューと評伝を併せた画期的な一冊！ 血と肉をそのまま差し出したような初期の作品群から絶筆『プラスチックのキリスト』までを収録！ 退廃とユーモア、残酷さと哀しみ――ディキンス・ハーの文学はいまなお色あせない。現在、出版準備中！



※この書影は参考イメージです。

血に飢えたブロンド

著者 ディキンス・ハー

訳者 高階政重

発行・装丁 中田満帆

2026年12月25日・初版

発行所 兵庫県神戸市中央区生田町1-1-13

新神戸マンション北館303号

a missing person's press

電話 078-200-6874

mitzho84@gmail.com